【論文】

一八九八年のドイツのハインリヒ王子の光緒帝への謁見

湯城吉信

はじめに

本稿では、一八九八年五月のドイツのハインリヒ王子の光緒帝への謁見の様子の再現を試みたい。

この時期、列強による中国の瓜分（分割）が進んだ。ドイツも中国に海軍の根拠地を得たいと思っていた。折しも、一八九七年十一月、山東省においてドイツ人宣教師二人が殺害され（鉅野事件）、ドイツは膠州湾を占領し、翌一八九八年三月には膠州湾租借条約を結ぶ。ドイツの王子であり海軍司令官でもあったハインリヒ王子の光緒帝への謁見はこの年の五月十五日に行われた。その後、一九〇〇年には外国人排斥を目指す義和団事件が起き、ドイツ公使も殺された。国内に目を向ければ、この謁見の翌月、戊戌の政変が起きた。まさに激動の時代であったと言える。

外国人の皇帝への謁見は、清朝を通じて大きな外交問題であった。外国人を朝貢使節とみなし臣下の礼を要求する清国とそれに反発する西洋諸国という対立図式が存在したからである。[1] 両者の摩擦として、祖先崇拝とキリスト崇拝を巡る典礼問題も有名であろう。

ただ、清末になると清国も徐々に門戸を開いていく。本稿で扱うドイツのハインリヒ王子の光緒帝への謁見は、各国の親王が皇帝に謁見する先駆けとなった。[2] 本稿は、この画期的謁見がどのように行われたのか、清国側とドイツ側とに摩擦はなかったのか、謁見前後の様子を

再現することを目的とする。[3]

次に、本稿で扱う史料・方法について述べておきたい。

まず、謁見までの経過（ハインリヒの中国入国）について、『翁同龢日記』や新聞『申報』により確認する。謁見に関しては、『清史稿』に記載があるが、記述が簡潔かつ事務的である。そこで、本稿では、謁見に関係した清朝の役人が記した『翁同龢日記』『張蔭桓日記』により具体的な様子を確認したい。このような日記は当事者の立場から具体的に記述されており貴重な史料である。ただ、本人によるバイアス（意図的および無意識の改変）や後世の編者による改変（意図的削除・改変、不注意による誤記）の可能性もあるので、注意が必要である。[4]

一、ハインリヒ王子の中国への派遣

本稿で紹介するハインリヒ王子とは、プロイセンの王族であったハインリヒ・フォン・プロイセン（Heinrich von Preußen）（一八六二～一九二九）である（図1）。全名はアルベルト・ヴィルヘルム・ハインリヒ（Albert Wilhelm Heinrich）だが、もっぱらハインリヒと呼ばれる。ドイツ皇帝フリードリヒ三世の次男で、次のドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の弟にあたる。

図1　ハインリヒ肖像
（1902年、アメリカ訪問時の写真）
（*Prinz Heinrich von Preußen: Eine Biographie Des Kaiserbruders* p.276）

ハインリヒは海軍の司令官を務め、後、海軍元帥になった。気さくな性格で人望があり、各国を訪問して優れた外交手腕を発揮し、外交担当の将軍というべき人物であった。後に各国訪問の経験を回顧録として出版しているらしい（『中国海関密檔』6　八四六頁に見える）。

ハインリヒは、清国や日本に何度も来ている。本稿で紹介する清国訪問の翌一八九九年六月には日本を訪問し天皇にも謁見している。それ以外に、一八七九年五月には、清国の次に日本も訪問し（夏をウラジオストクで過ごして十月に再来日している）、一九一二年九月には明治天皇の葬儀に参加するため日本に来たことがあった。[5]

一八九七年十一月にドイツ人宣教師が殺される鉅野事件（鉅野教案）が起きた際、清国側は地方官の罷免と賠償金の支払いで解決を図ろうとしたが、ドイツ側は納得せず、ハインリヒを派遣し強硬な権利要求を行おうとした。ハインリヒは、十二月十六日装甲艦ドイッチュラントに搭乗、ゲフィオン艦を伴ってキールを出発した。[6]翌一八九八年三月、ドイツは清朝と膠州湾租借条約を締結することができた。この時、清国側は李鴻章、翁同龢、ドイツ側は大使のハイキング（Edmund Heyking）が関わっている（いずれも本稿で後に登場する）。[7]

二、北京に来るまでの旅程

ハインリヒが北京に来るまでの様子（旅程）は、上海の新聞『申報』や『翁同龢日記』に見える。『申報』は、ハインリヒがインド洋に着いた二月頃から十二月一日に厦門から香港に発つまで、随時その動向を伝えている。それらの記述を見れば、ハインリヒがいつどこに着くのかが人々の大きな関心事となっていたこと、だが天候や現地での都合により旅程がなかなか定まらなかったこと（関係者はやきもきしたことであろう）、上海、北京をはじめとする各地での派手な歓待が注目の的になっていたことがわかる。

以下、その様子をたどってみよう。[8]なお、『翁同龢日記』や『張蔭桓日記』は日付が旧暦で記されているが、本稿では日付は新暦を主とし、旧暦の日付は（　）で記した（日付がないものは謁見当日の五月十五日）。

二月二十三日にシンガポールに到着した一行は、三月はじめ（八日にはいる）には香港に、四月十七日（四月十九日記事）には上海に着いたようだ。

上海での様子について、『申報』は「徳藩遊滬記」という五回にわたる連載を組み、ハインリヒがドイツをは

じめとする各国の官商と派手な宴会を開いていた様子を報道している（『翁同龢日記』には二十三日に宴会の記録がある）。

だが、ハインリヒは派手な外交活動をしていただけではない。福建省福州やマカオを視察していたことが『申報』（一面）（五月十四日「備迓親王」）、『翁同龢日記』四月二十六日（初六日）、五月二日（十二日）に見える。

四月三十日頃、上海を発ったハインリヒは、軍艦三隻、兵二千を率いてドイツが租借した膠州湾へと向かう。その後、烟台を経由し、天津に上陸し、北京へと向かう。

ハインリヒが北京に入ったのは五月十三日である。天津では風のため停泊できず、小船に乗り換えて上陸したようだ。ここで総督やドイツ大使が出迎え、いっしょに汽車で北京に行った。

三、『清史稿』に見える謁見に関する記述

ハインリヒ王子の光緒帝への謁見については、『清史稿』「本紀二四・德宗本紀二」で言及されている。ただ、以下のように簡潔に事実の記録のみがある。[9]

戊寅、見德親王亨利於玉瀾堂。己卯、還宮。

（戊寅の日（＊五月十五日）、ドイツ王子ハインリヒと玉瀾堂で面会した。己卯の日（＊十六日）、紫禁城に戻った。）

一方、『清史稿』「志六六・礼十・外国公使覲見礼」には、謁見の儀礼が詳しく記述されている。周知のように、中国において儀礼はその末節まで細かく規定されていた。それは儀礼がお互いの関係を確認し規定するものだからである。そのため、礼儀の様子を見ればその時の両者の関係（少なくとも中国側がドイツ側をどのように扱っていたか）を確認することができる。以下、原文を引用する。

各國親王覲見儀、始光緒二十四年。德國親王亨利入覲、帝幸頤和園、御仁壽殿、亨利公服入、遞國書、帝

慰勞之。既、亨利欲覲皇太后、帝奉懿旨代見。是日巳刻、御玉瀾堂、亨利偕德使海靖等入、外部司官引殿東便門外入布幄少憩。駕至、扈從如儀、鳴鞭三、升座。慶親王等侍左右、外部長官率亨利等自中門入、北嚮一鞠躬、行數武又一鞠躬、至龍柱前又一鞠躬。然後奉國書進、慶親王降左階接受、陳玉案。亨利等又一鞠躬、帝頷首答之、操國語慰勞。慶親王跪案左聆玉音、降階、操漢語傳宣。德繙譯官譯畢、亨利等又一鞠躬、帝仍頷首答之。亨利等退數武又一鞠躬、退至堂左、又一鞠躬。禮成。

（各国の親王が謁見する儀礼は光緒二十四年に始まった。ドイツ王子ハインリヒが謁見に訪れ、皇帝が頤和園に行幸し、仁寿殿に臨御された。ハインリヒは礼服で入り、国書を手渡し、皇帝は慰労された。終わると、ハインリヒは皇太后に謁見したいと希望し、皇帝がその旨を皇太后に伝えた。同日、巳の刻（午前十時から十二時頃）、玉瀾堂に臨御され、ハインリヒはドイツ大使ハイキングらを伴って入り、外務部長官が堂の東の便門（＊脇門）の外の幕に誘導して待たせた。皇帝が至ると、随従が儀礼に則り鞭を三回打ち鳴らし、着座された。慶親王らが左右に侍し、外務部長官がハインリヒらを導いて中門から入り、北に向かって一回お辞儀し、数歩行ってさらに一回お辞儀し、龍柱の前に至ってさらにまた一回お辞儀した。その後国書を奉って進み、慶親王左の階段を降りて受け取り、玉案（＊皇帝の前の台）に奉った。ハインリヒらはまた一回お辞儀し、皇帝は頷づいてお答えになり、国語（満州語）で慰労された。慶親王は玉案の左に跪き皇帝のお言葉を聞き、階段を降りて中国語でお言葉を伝えた。ドイツの通訳が翻訳を終え、ハインリヒらはまた一回お辞儀をし、皇帝はまた頷いてそれに答えた。ハインリヒらは数歩退いてまた一回お辞儀をし、堂の左に退き、また一回お辞儀をした。かくて儀礼は終了した。）

このように、礼制を記録する「志」においては、謁見の儀礼が詳細に記されているように見える。ただ、後述するようにこの記述には誤りがある。

四、『翁同龢日記』と『張蔭桓日記』に見える謁見に関する記述

以下、『翁同龢日記』と『張蔭桓日記』[10]からハインリヒ王子の光緒帝との謁見の様子を確認したい。翁同龢と張蔭桓はともに当時の清朝の官僚であり、この謁見に立ち会った。

『清史稿』「志六六・礼十・外国公使覲見礼」が儀礼の次第を機械的に述べるのとは異なり、両日記では当時の様子やその背景まで当事者の立場から具体的に述べられている。また、『清史稿』「志六六・礼十・外国公使覲見礼」の記述が正しく事実を反映したものではないことがわかる点が注目に値する。

(一) 翁同龢と張蔭桓について

翁同龢（一八三〇～一九〇四）は、清末の政治家。江蘇省常熟の人。光緒帝の帝師として帝の信任も篤かったが、西太后派と対立し、戊戌の政変直前に西太后の圧力で解任された。

一方、張蔭桓（一八三七～一九〇〇）は、清末の官僚・外交官。号は樵野。広東省南海出身。総理各国事務衙門の後、戸部以下、六部を歴任した。日清戦争後、全権大使として派遣されたが日本側から交渉を拒否され、李鴻章と交代した。戊戌の政変後は、新疆へ流罪となり、義和団の乱の最中に処刑された。ハインリヒ王子の謁見については、その次第を考えた重要人物であった。[11]

以下、両日記の原文は、繁体字を使用した。引用文中の（　）は割注の記述を表す。（＊　）は湯城による注記を表す。

(二) 謁見場所・謁見方法についての事前相談

謁見の具体的方法、例えば式次第や皇帝の御言葉は張蔭桓が起草したことが『翁同龢日記』に見える。[12]ただ彼はあくまで実務担当者である。決定権は光緒帝や西太后にあったはずだが、皇族の重鎮である慶親王（奕劻）が中心人物として関与した。[13]五月十五日の謁見の一か月前の四月八日にはほぼその方法が決定したようだ。[14]

①謁見場所についての議論

この謁見の場所をどこで行うか、またどのような方法で謁見するかは大問題であった。『翁同龢日記』には、光緒帝は紫禁城での謁見を主張したが、翁同龢が反対し光緒帝の機嫌を損ねたことが見える。[15] 紫禁城の南東の東華門から駕籠に乗ったまま入れて紫禁城の中心に位置する保和殿の北東にある毓慶宮で謁見すればよいという光緒帝に対して、翁同龢は以下のように反論している。

ご優遇は結構ですが、問題があります。第一に、毓慶宮の手前の殿は惇本殿と言いますが、そこの東の間には供孝静皇后（＊道光帝の側室で、恭親王奕訢の母）の肖像が飾ってあり、そこを通路にすることはできません。第二に、配殿は狭すぎて座席を設けることができません。第三に、随従に謁見する場所もありません。第四に、前星門は百年近く開いたことがなく、立て付けがおかしくなっています。第五に、駕籠に乗って門に入るのは無礼です。

それを聞いた光緒帝は「お前たちはいつでも反対する。お前たちが列挙することも本当にその通りか。」と怒ったという。[16] 光緒帝に実権がなかったことが窺えよう。この謁見場所については西太后は紫禁城でも頤和園でもよいと考えていたようで、頤和園にこだわったのは清朝の官僚たちだったことが窺える。

頤和園にした理由は、上記に見えるように、紫禁城が荒れていたことや王宮に入れたくないということがあったのだろう。いずれにせよ体面（面子）上の理由である。翁同龢が張蔭桓に相談しても、「毓慶宮はよくない。中南海（西苑）ならまだましだ。」と言ったという。[17] 政治の中心から外に向かって、紫禁城・中南海・頤和園という序列が存在する。その中なるべく遠いところで謁見させたいという清朝側の意図があったのであろう。ちなみに、十八世紀、イギリスの使節マカートニーが招かれたのは頤和園の隣の円明園であった。[18]

なお、この謁見場所については、当時の駐中国大使ハイキングの夫人の日記『徳国公使夫人日記』四月二日の記事に言及がある。以下、そのあらましを述べる。

中国人は謁見会場を万寿山（＊頤和園）にしたことに非常に満足していた。なぜならそこは設備の保存状態がよく、一方北京の宮殿は荒廃が激しかったからである。一方、彼らは万寿山が皇太后のプライベートな場所であるため、実際の手はずを整える上で問題もありえると考えていた。また、もし北京で謁見することになれば、ふだん大使が謁見する宮殿ではなく、皇帝の書斎で、王子だけを入室させて行うという案を述べた。

最後の方法について、ドイツ側は異議を唱えている。謁見方法について、私的面会という形にして王子の格を下げ中国の体面を保とうとする清朝側と王子の格を上げようとするドイツ側で攻防があったことがわかる。

なお、注目すべきは、この『徳国公使夫人日記』の記事が四月二日の記録の中に見えることである。先に述べた『翁同龢日記』では、四月三日（旧暦の十三日）に皇帝と謁見場所についてやり取りしたとあるが、両者の日付に誤りがなければ、皇帝との話の前に場所が決まっていたことになる。

②謁見方法についての議論

上記の『徳国公使夫人日記』を見ても、謁見場所やその方法については、清朝側とドイツ側とで事前協議が行われたことがわかる。謁見方法について激しく議論されたのは、西太后との謁見の際ハインリヒ王子に椅子を用意するかどうかであった。ドイツ側は王子が座る椅子を準備することを要求したが清朝側は断固として拒否し、それにあくまでこだわるなら謁見自体を中止すると述べた。[19]

『徳国公使夫人日記』にも、西太后が会いたがったので、ドイツ側はそれを認める代わりにハインリヒに席を用意せよと言ったことが見える。なお、『翁同龢日記』『張蔭桓日記』ともに、ハイキングが独断では決められないので、ハインリヒが到着してからお答えすると言い、先延ばしにすることに不満を表している。[20]

この「座席問題」は、謁見直前までもめていたよう

だ。『翁同龢日記』によれば、謁見前々日の五月十三日の時点でドイツ側はまだ席を賜わることを要求し慶親王はそれを拒否していた。[21] 結局、ハインリヒが清朝側に折れたことで清朝側の意向が通ることになった。このことを翁同龢は慶親王の交渉の成果だと記している。[22]

(三) 謁見当日の様子

謁見当日の様子は、『翁同龢日記』『張蔭桓日記』とも に詳細な記録を残している。以下、主として『翁同龢日記』によりつつ、『張蔭桓日記』やその他の史料で情報を補いながら、当日の様子を述べたい。[23]

翁同龢は五月十五日午前十時頃、東宮門から頤和園に入り、聴起処（皇帝との面会場所）に集合した。十一時前にハインリヒ王子が到着した。兵士二十四人を引き連れ、馬車に乗ったまま宮門に突入してきたので、翁同龢は叱って降ろさせた。兵士は外に出るように言ったがドイツ側は聞かなかった。[24]

この帯同した兵士を使ってハインリヒは皇帝へ表敬儀礼（光緒帝の閲兵）を申し出た。[25] だが、このことを『徳国公使夫人日記』では「我々の軍人の雄姿を示した」[26]と表現している。ドイツ側からすると誇示行動であったのだろう。ただ、この兵士帯同にはそれ以外にもっと切実な理由があった。

それはハインリヒが狙われているという噂があったことである。[27] この噂については、ドイツ側が上海から情報を得て、清朝側にも伝えていた。[28] この時実際このような企てがあったかどうかは不明だが、この前年の一八九七年十一月にドイツ宣教師が殺されていること、この二年後の一九〇〇年の義和団事件の際にドイツ公使が殺されていることを考えれば、全くのデマとも言えなかった可能性がある。

さて、頤和園に着いたハインリヒは南配殿に入った。大使のハイキングを始めとする随従は、翁同龢から「ここは王子専用の場所なので他の者は中門の外にいるように」と言われたが従わなかった（注1参照）。兵たちは南配殿の階段の下に控えていた。

その後、三十分ほどして、慶親王がハインリヒ、ハイキング、通訳二人および蔭昌（一八五九～一九二六、満

図2　ハインリヒ王子の光緒帝との謁見の図
(*Prinz Heinrich von Preußen: Eine Biographie Des Kaiserbruders* p.265)
＊これはあくまでドイツ側のイメージである点要注意。

州族の政治家。ドイツに留学経験を持ち、清朝側の通訳の役割を担った）を連れて、まず楽寿堂で西太后に謁見し（注19参照）、四十五分ほどして、玉瀾堂で光緒帝に謁見した。皇帝との謁見の様子については、『翁同龢日記』より『張蔭桓日記』の方が詳しいので、以下『張蔭桓日記』から引用する。

少頃、慶邸引導德親王覲太后於樂壽堂。隨班四人、一海靖、一中軍、一葛爾士、蔭昌隨慶邸傳譯。禮畢、慶邸導至德和園少坐。太后賜贈珍珠寶星二枚、玉、磁、銅諸器八色、畫扇錦緞各物、德親王稱謝。旋覲上於玉瀾堂、合肥與余輩在殿門下侍班。上御玉瀾堂、寶座右置小机子、加綉墊。德親王入殿門、免冠鞠躬、上立受。德親王立於暖閣下、先陳來意。旋帶見參隨、海靖在内共十八人、以次鞠躬旁侍。德親王復面呈方物紫磁瓶一對。上徐諭慶邸導上暖閣、與之握手、指机子令坐。上勞問、何時離柏林、經過幾國海口、何時入中國境、各省督撫接待何如。德親王具對稱旨。禮成後、上握手送之。

（しばらくして、慶親王はドイツ王子を導いて楽寿堂で皇太后に謁見した。お付きの者は四人で、ハイキング、中軍（＊武官）、ゴルツ（＊通訳）に、蔭昌が慶親王に従って通訳をした。儀礼が終わると、慶親王は徳和園に導きしばらく座った。太后は、真珠の勲章を二枚、玉と磁器と銅の器物を八件、画扇、綿緞各物を下賜され、ドイツ王子はお礼を述べた。ついで玉瀾堂で皇帝に謁見し、李鴻章と我々は殿の門の下で待機した。皇帝は玉瀾堂にお出ましになり、玉座の右に小さ

い腰掛を置き、刺繍の入ったクッションが置かれていた。ドイツ王子は殿の門に入り、冠を取りお辞儀し、皇帝が立ったまま受けた。ドイツ王子は暖閣の下に立ち、まず来意を述べた。ついでハイキングを含めて十八人の随従が、順番にお辞儀をし傍に待機した。次に、ドイツ王子は自ら献上物の紫の磁器の花瓶一対を献上した。皇帝は徐ろに慶親王を導いて暖閣（＊故宮養心殿に東暖閣（西太后垂簾聴政の場）・西暖閣あり）に登るよう諭し、ともに握手をして、腰掛を指さして座らせた。皇帝は、いつベルリンを経ったのか、何か国の港に立ち寄ったのか、いつ中国国内に入ったのか、各省の督撫の応対はどうだったかと慰問された。ドイツ王子はつぶさに答えた。儀礼終了後、皇帝は握手してお見送りになった。）

ここで注目すべきは、西太后との謁見では用意されなかった座席は、光緒帝との謁見では腰掛が用意されていることである。小さい腰掛ながら刺繍入りのクッションを乗せていることや、使われたのは謁見儀式の後だというところに清朝側の心遣いが窺えよう。なおこの謁見の時、ハイキングらは堂の中に入ったが、翁同龢、張蔭桓らは軒先に立ち、護衛が堂の内外に立っていた。[30]

なお、光緒帝との謁見場所は、『翁同龢日記』『張蔭桓日記』ともに玉瀾堂と記録しているが、上述の『清史稿』志六六では仁寿殿と記していた。これはどうしてなのだろうか。このことについては『張蔭桓日記』に、謁見当日、官報がドイツ使節が仁寿殿で謁見すると誤って報道し、ドイツの通訳がくどく言い争ったため、慶親王と相談して広報部に訂正させたという記述が見える。[31] つまり、『清史稿』はこの誤報に基づいていることになる。『清史稿』の史料の信憑性については注意が必要である。

それでは仁寿殿と玉瀾堂はそれぞれどのような場所だったのか。仁寿殿は、皇帝が政務を行った場所であり、頤和園の中心の建物である。一方、玉瀾堂は光緒帝の寝室があった場所で、光緒帝の私的空間である（戊戌の政変の後、光緒帝はここに幽閉された）。官報が仁寿殿と誤報したのはもともとそういう計画があったことを示唆する。一方、それが玉瀾堂に変更されたのは、格下

げを意図したものであると考えられよう。また、それに対してドイツ側が異議を唱えたのは、格上げの要求であろう。謁見場所についての両者の攻防の一端を垣間見ることができよう。

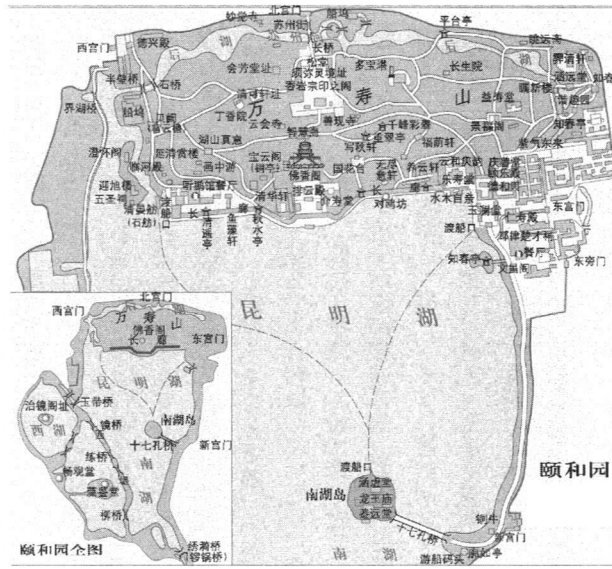
さて、謁見は十五分ほどで終わり、その後、ハインリヒは南配殿に退き食事を取った。（伝統的謁見でも謁見後に茶や食事を賜った（『大清会典』巻五六「礼部・主客清吏司・賓礼・朝貢」参照）。）ここでもハインリヒの随従は外に出ることを拒否し、車座になって飲食したという。[32]

その後、三十分ほど経った十二時頃、光緒帝が南配殿を訪れ、ハインリヒ王子に第一等第二勲章を授与した。[33]そして、この時、皇帝によるドイツ兵の閲兵が行われた。これは、先に述べたようにドイツ兵が園内に立ち入ったことにより急遽行われることになったものだ。ドイツ側の要請を受けて慶親王が急遽、光緒帝に申し上げることで実現したが、[34]当日予期せぬ対応を迫られ清朝の官僚はやきもきしたことであろう。

閲兵に際して、ハインリヒ王子は殿の階段に立って自ら歩兵二列を指揮した。[35]閲兵の様子について、『翁同龢日記』は以下のように描写する。

> 德兵見上至三舉槍、擊銅鼓、帶兵者拔刀禹步以爲致敬、上立視、諭云兵皆精壯、甚可觀。
> （ドイツ兵は皇帝を見て三度銃を掲げ、銅の太鼓を鳴らし、指揮する者が刀を抜き禹歩して、敬意を表した。皇帝は立ってご覧になり、兵は精鋭ですばらしいとおっしゃった。）

その後、蒸気船に乗って昆明湖を渡り、南湖島の龍王堂に遊覧している。これは西太后の命により慶親王が手配したもので、張蔭桓らが付き添った。[36]慶親王、張蔭桓は、ハイキングやゴルツといっしょに船に乗り、その他の人員は分散して小舟に乗った。南湖島は対岸に頤和園の中心である万寿山を望む絶景スポットである（図3）。月波楼に上り景色は楽しんだであろうが、龍王堂では石の洞が暗かったのでハインリヒ王子は怖がって中に入らなかったという。



＊右上の建物が密集している地域に、東宮門、仁寿殿、玉瀾堂、楽寿堂、渡船口などが見える。南湖島には、龍王廟が見える。

図3　現在の頤和園の遊覧図

その間、李鴻章や翁同龢らは承沢園（頤和園の東、現北京大学構内）で宴会の準備をしていた。[37] 頤和園の東には三山五園と呼ばれる皇族の園林が広がっていた。承沢園もその一つで、当時は慶親王に下賜された私的空間であった。ちなみに、一八五六年の第二次アヘン戦争や一九〇〇年の八カ国連合軍の略奪を被った円明園も三山五園の一つである。

十四時にハインリヒが到着し、慶親王が主催者となって宴会を設けて歓待した。西洋人は十一人、清朝側は十三人が参加し、十六時に散会した。散会後は十五分から三十分ほど散歩して、楼に上がって景色を楽しみ、十六時三十分頃終了した。一日の仕事を終えた翁同龢は疲れ切っていた。[38]

なお、宴会の様子は『張蔭桓日記』に以下のように述べられている。

德親王告余以曾在倫敦兩晤梁震東、今日必須同座飲。承澤園讌座原定廿四人、筠丈適銷假、育周亦願入座、已商海靖刪去一人、尚不敷座、遂商蔭五樓另酌。及德

親王宣頌時、乃無德繙譯、震東以英語譯之、德親王亦能領受。既酌、慶邸復酌、余引滿爲懽。三點鐘席散。所假赫德音樂節奏竝諧、德親王極口稱謝、海靖亦以爲意外之喜。主客均懽、就茶座握手爲別。

（ドイツ王子は、私に、かつてロンドンで二回、梁震東に会ったことがあるので、今日は必ず同席させてほしいと言った。承沢園の宴会はもともと二十四人に設定していたが、許応騏がちょうど休暇明けで、載振（＊慶親王奕劻の子）も同席することを願ったので、ハイキングと一人を減らすよう相談していたが、なお席が足りないので、蔭昌と相談して別に席を設けることにした。ドイツ王子が挨拶を述べる（ドイツ王子に対することば？乾杯？）時、ドイツの通訳がいなかったので、震東が英語で訳し、ドイツ王子も理解することができた。乾杯後に、さらに慶親王が乾杯をし、私も心ゆくまで飲んだ。三時？に散会した。借りてきたハートの音楽は演奏がすばらしく、ドイツ王子はしきりにお礼を述べ、ハイキングは望外の喜びだといった。主客ともに楽しみ、ティータイムで握手をして別れた。）

なお、『翁同龢日記』によると、この日の料理は洋食で、途中、ハインリヒに請われて慶親王、李鴻章、翁同龢らが書を贈っている。[39]

また、ここに登場するハートとは、長年清朝に仕えた英国人ロバート・ハート（一八三五～一九一一）である。ハートは、咸豊四年（一八五四）、中国に来て、香港の英駐華商務監督署で通訳となり、後、寧波、広州でも通訳を務めた。一八六三年に総税務司となり、一九一一年に亡くなるまで務めた。総税務司とは、清朝の雇った役人で、関税を徴収・監督する役目を担ったが、中国外交へのイギリスの目付としても重要な役割を果たした。特にロバート・ハートは長期に渡りこの職を務め大きな権限を持った。[40] このハートが作った「総税務司楽隊」は全国に名が知られ、毎年春秋に総税務司庁庭園内で野外コンサートが開かれ、外国人貴顕が集まった。[41]

このような西洋式の宴会が行われたことを王蓮英「張蔭桓与戊戌年間清廷外交儀礼改革―以光緒皇帝接見徳国

亨利親王為例」は清朝の礼儀改革と評価する。だが、これは皇帝がハインリヒを国賓として招いた宴会ではなく、慶親王という高官が自らの私的空間で開いた宴会である点を看過してはなるまい（ハインリヒが北京到着直後に清朝の高官を招いた宴会に対するお返しに当たるのだろう）。皇帝がふるまったのは謁見後の南配殿での食事であり、これは伝統的朝貢において皇帝が茶や食事をふるまったことに相当するものと言えよう。

散会後、ハインリヒは天妃廟に行き着替えをして北京に帰った。この日、ハインリヒは東交民巷（現在の天安門広場の東にあった大使館地区）のドイツ大使館から出発し、西直門を出て馬に乗って御河（北京市街の北西から頤和園に通じる用水路。旧時、皇族が西郊の御苑に遊ぶ際、船に乗って通った皇族専用の水路であった）に沿って北西に向かい、媽祖を祭る天妃廟（娘娘廟）で着替えて頤和園に向かっていたので同じルートを帰ったことになる。なお、世話をした張蔭桓はヨーロッパ人の荷物の多さに驚いている。[43] 一日中働いた張蔭桓は疲れで北京に戻る気力がなく、近くの戸部の宿舎に泊まった。[42]

一方、北京に帰ったハインリヒはさらにイギリス大使館との食事会に参加したようだ。[44] 上海でも各国大使との饗宴に忙しかったハインリヒは北京でも同様の活動に忙殺されたのである（二日前に北京に着いたばかりであったが、その翌日には競馬場に行っていた）。[45]

（四）謁見から北京出発までの行動

以下、謁見後、五月十六日から二十五日に北京を発つまでのハインリヒの行動を『翁同龢日記』（「記徳親王亨利到京事」）『張蔭桓日記』『徳国公使夫人日記』により再現したい。[46]

張蔭桓は、謁見翌日の五月十六日、イギリス大使からドイツ側が喜んでいると聞いた。[47] 上述の当日夜の晩餐会でハインリヒがイギリス大使に話したのであろう。

ハインリヒはその後、二十五日に北京を発つまで忙しい時間を過ごしている。五月十六日から十八日にまでは北京の名所を訪れる傍ら各国大使と食事を共にし、十九日から二十二日は万里の長城、明の十三陵など郊外を視察し、二十三日には外務省に相当する総理各国事務衙門

を訪れ膠州湾について話し合い、二十四日には中南海で再び光緒帝と謁見し、二十五日に汽車に乗って北京を出発した。

① 北京市内、郊外の視察

以下、日程を詳しく述べる。

五月十六日、ハインリヒはハイキングらと天壇を訪れ、オランダ大使館で食事をし、さらに西什庫内の教会を訪れた。なお、翁同龢、張蔭桓ともに、天壇においてハインリヒが清朝の要求に従い、門の前で下馬し、各宮殿で帽子を取りお辞儀をしたことを特記している。[48] ハイキングは夫人を同行しようとしたがハインリヒが阻止したということから、大使のハイキングより王子のハインリヒの方が清朝側に配慮を見せたことが窺える。

十七日には、雍和宮、東横寺を訪れ、オーストリア大使と食事をし、西横寺を見た後、景山に行った。夜はイタリア大使館で食事をし、さらにイギリス大使館で茶会に参加している。これらの案内は、謁見当日の宴会にも参加していた内務府大臣の世続世（伯軒）（一八五二～一九二一）が担当した。[49]

十八日は、キールフ商会、玉珍古玩局を訪れ、昼はベルギー大使館で取り、晩は台基廠海関館の茶会に参加し、さらに二十時から一時まではロシア大使館の晩餐に参加した。

十九日から二十二日は、万里の長城、明の十三陵を見に行った。十九日は徳勝門から出て南口義興店で宿を取った。

二十日は、居庸関、八達嶺を訪れ、砲台八か所を撮影したという。この日は南口公館に泊まっている。砲台を撮影したのは、軍事視察としての目的もあったからであろう。[50]（『徳国公使夫人日記』によると十二名の海軍将校を同伴していたという。）

二十一日は、明の十三陵を訪れ、湯山に泊まり、二十二日の朝、ようやく帰京した。そして、二十二日、[51] ハイキングらを伴って総理各国事務衙門（外務省に当たる）に行き、膠州湾の問題について話している。膠州湾はドイツ側が清朝から租借することに決まっていたが、実際の運用については様々な問題が発生したようだ。[52]

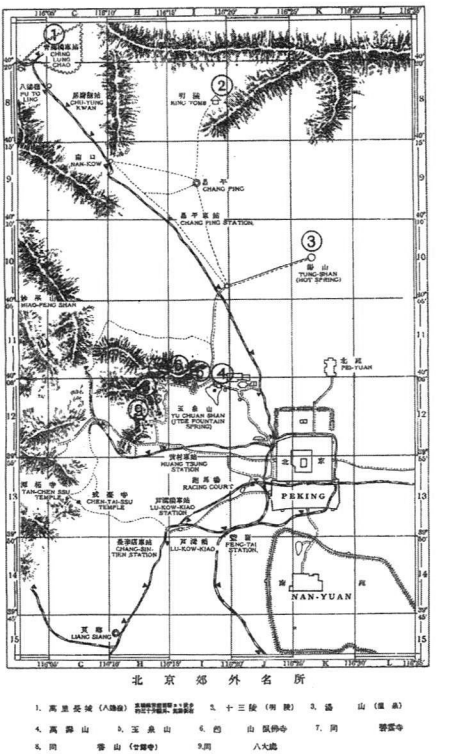


図4　北京北郊地図（（村上知行『北京一名勝と風俗』（東亜公司、1939年、第四版））
＊左上①附近に八達嶺、居庸関、南口が、中央右の③附近に湯山が見える。④が頤和園。

この晩、張蔭桓はドイツ大使館に行った。慶親王やヨーロッパ人の賓客、二十四人が招かれ晩餐が開かれたからである（『夫人日記』五月二十二日の記事）。付き添った張蔭桓は寝室にまで招かれ、夫人と幼子の写真を見せられ、「情に厚い人のようだ」と感想を漏らしている。[33] 清朝側、ドイツ側ともに徐々に打ち解けてきたのであろう。ただ、興味深いのは、この時の様子について、『徳国公使夫人日記』では、以下のような記述があることである。

ハインリヒ王子は自ら中国人客を導き大使館内を案内した。彼らは新たに壁に掛けられた四幅の王子夫人の肖像画に興味を示し、慶親王は「これは別々の夫人ですか」と尋ねてきた。ハインリヒ王子は、「違います。私は四人も夫人を養えませんよ。」と答えた。[34]

同じ場面を描いても双方の着眼点に違いがあること、ハインリヒのユーモアや人となりが見える点、興味深い。

②中南海勤政殿での再謁見

その二日後の二十四日、ハインリヒは中南海の勤政殿で再度光緒帝と謁見している。場所が中南海になったことについて、『徳国公使夫人日記』は、清朝側は再度頤和園に来るように言ったがハインリヒが拒否したからだ

という。[55] これが本当だとすると、ドイツ側が主導権を握り待遇の格上げに成功したことになる。[56] ただ、今回はドイツ側はもう兵隊は帯同して来なかった。

彼らは十一時に大使館を出発した。『徳国公使夫人日記』には、軍服を身に着け、ドイツの国章である黒鷲（アドラー）の勲章をつけたハインリヒが颯爽と皇宮に向かったとある。[57]

儀礼は十五日の謁見に準じて行われた（『張蔭桓日記』）。この日の謁見の内容は、膠州湾についてのことであった。ハインリヒは膠州湾での演習について言及し、両国とも停泊を許すので、ドイツ側に管理させるようにと伝えた。慶親王が仲立ちに入り、間接的に伝えたようだ。[58] その他は大した話題がなく十分余りでお開きになり、簡単な食事を賜った後に、北海を遊覧した。ただ、連日の接待の疲れであろう、双方とも疲労困憊しており、最後は見送りもなしに別れた。[59]

翌二十五日、ハインリヒは二週間弱の北京滞在を終え、朝八時に大使館を出発し（『徳国公使夫人日記』）汽車に乗って北京を後にした。

おわりに

以上、本稿では、謁見に関与した清朝の官僚の日記を中心に、一八九八年のドイツのハインリヒ王子と光緒帝との謁見の様子を再現した。これらの日記には『清史稿』に見えない具体的記述が見え、当時の様子を如実に知ることができる。また、『清史稿』に誤りがあることがわかる点でも貴重な史料である。

また、本稿では、一部、ドイツ側の記録も参照し、清朝側とドイツ側の見方の違いを探った。清朝側にとってもドイツは厄介な相手であっただろうが、ドイツ側にとっても清朝側は得たいが知れない厄介な相手であった。『徳国公使夫人日記』を見ると、ドイツ側も主導権を握ろうとして躍起になっていたことがわかる。ハインリヒ王子がハイキングらに語ったことばが記録されている点も貴重である。その詳しい紹介は稿を改めて行いたいと考えている。また、筆者は扱う力量がないが、より広くドイツ語の史料（ハインリヒ自身の回顧録があると聞く）を活用すれば、この謁見についてより詳しい実態

を明らかにできるであろう。協力者が得られればぜひ行いたいと思う。

注

(1)『徳国公使夫人日記』には、一八九七年二月二十六日、皇帝が大使たちを宮廷に招いた新年会におけるドイツ側と清朝側の衝突についての記述が見える。宮廷内の道で大使たちは中央を歩くことが許されていなかったにも関わらずドイツ大使ハイキングが中央を歩いたため総理衙門大臣の敬信が引き戻そうとしたため争いになった。アメリカ大使が仲裁に入る大事になったが、後日、結局、敬信がハイキングに謝罪することで決着を見た(張鳴「一場不為人知的東西礼儀之争」参照)。ハイキングは一八九八年のハインリヒの謁見の際にも同行していた。清朝側は気が気でなかっただろう。

(2)後に引用する『清史稿』「志六六・礼十・外国公使覲見礼」を参照。

(3)この謁見についての研究に、王蓮英「張蔭桓与戊戌年間清廷外交儀礼改革—以光緒皇帝接見徳国亨利親王為例」、王開璽「戊戌時期清廷覲見礼儀的改革」がある。両者とも改革派と守旧派という対立図式で見る。それに対して、本稿では、清朝対ドイツという対立軸に基づき時系列に沿って詳述したい。なお、公使と皇帝の謁見場所については、王開璽「外国公使覲見清帝的地点之争与中外関係」がある。

(4)岡本隆司『近代中国研究入門』一三三頁、一五一頁。この点、『張蔭桓日記』については、本稿では影印本を確認した。

(5)宮内庁編『明治天皇紀』四巻、五巻、九巻、十二巻に来日の記事が見える。一八八〇年二月の釈迦が池遊猟事件を起こしている(この事件およびハインリヒについて、山中敬一「1880年プロイセン皇孫ハインリヒ吹田遊猟事件」が詳しい)。一八九九年の来日については、エリアノーラ・メアリー・ダヌタン『ベルギー公使夫人の明治日記』一五八、一五九頁に記述が見える。

(6)斎藤良衛『近世東洋外交史序説』四二七頁。

(7)この時の交渉内容については、浅田進史『ドイツ統治下の青島—経済的自由主義と植民地社会秩序』が詳しい。

(8)『申報』に見えるハインリヒ訪中関係記事(北京到着前)は以下のようなものがある。

一八九八年二月八日(正月十八日)二面「備迓徳藩」、二月十一日(正月廿一日)一面「徳藩行程」、二月二十七日

（二月初七日）一面「德藩抵叻」、三月三日（二月十一日）三面「憲節折回」、三月四日（二月十二日）一面「詢問行程」、三月九日（二月十七日）二面「德藩抵滬」、三月十日（二月十八日）一面「綜紀德藩抵叻事」、四月十八日（三月廿八日）三面「德藩抵滬」、四月十九日（三月廿九日）三面「德藩遊滬小記一」（続きが四月二十日、二十一日、二十二日、二十六日にあり）、五月十四日（閏三月廿四日）一面「備迓親王」、五月十八日（閏三月廿八日）二面「德藩過津」。

（9）『東華録』や『清実録』でも以下のように簡潔に記されている。

『東華続録（光緒朝）』巻一四四「戊寅　上御玉瀾堂。德國親王亨利覲見。」

『大清德宗景（光緒）皇帝実録』巻四一七「上御玉瀾堂。德國親王亨利覲見。」

ちなみに、胡思敬『戊戌履霜録』巻二にはこの謁見についてやや詳しい記述が見える。

（10）『翁同龢日記』『張蔭桓日記』については参考文献に挙げた数書を参照した。

（11）『翁同龢日記』三月二十七日（初六日）および四月五日（十五日）の記事を参照。

（12）『翁同龢日記』三月二十七日（初六日）「（…德王進見礼節、張公所定也。）」

四月五日（十五日）「（見德親王口勅語、張侍郎所擬也。）」

＊原文引用部における（　）は割注を表す（以下、同じ）。

（13）『翁同龢日記』四月七日（十七日）

「…是日德王在何處進見摺上、奉硃批、朕欽奉皇太后懿旨、著在園内進見。蓋昨日慶邸來園先有敷陳也。」

（14）『翁同龢日記』四月八日（十八日）

「…樵野昨今兩次召對、今日皇太后見於樂壽堂、詳論洋務、擬先召見德王於樂壽堂（立見）、然後上召見於玉瀾堂、仍賜游賜食、以盡邦交之禮。」＊樵野は張蔭桓。

（15）『翁同龢日記』四月三日（十三日）

「…上…又云德親王進見、在園不便、恐其請見慈聖、懿旨著在宮内。又云著在毓慶宮、開前星門、於東配殿賜食、准其乘轎入東華門。臣對優待極矣、然有窒礙、毓慶前殿曰惇本殿、東間供孝静皇后御容、萬不能辟中間爲過路、一也。配殿極隘無容席地、二也。參隨無別處可見、三也。前星門近百年未啓、框木沉陷、四也。乘轎入門非禮、五也。上皆駁之、并盛怒、責剛毅、謂爾總不以爲然、試問爾條陳者能行乎否乎。因論赫德亦可見、從前漢納根欲見、爲恭親王所阻、并傳張蔭桓、將前日所開禮節照舊遞上、十七日摺仍雙請。前後語不能悉記。記之者、知聖意焦勞、臣等因循一事不辦、爲可愧憾也。…訪樵野、樵野斟酌、

以爲毓慶宮似未宜、不如西苑、余未敢應。又訪李相告如前。…晩飯後、訪慶邸傳旨、慶云昨日崔太監傳懿旨令籌此事、在宮在園似尚兩可、亦問恭邸、邸對乾清宮亦可、擬十七日面請慈諭也。」＊剛毅（一八三七～一九〇〇）は、満州族出身の大臣。戊戌政変後、首謀者を処刑したことや義和団を支持したことで知られる。…剛毅らとの対立を強調するための改竄がないか疑いはある。

(16) 四月三日（十三日）
「上皆駁之、并盛怒、責剛毅、謂爾總不以爲然、試問爾條陳者能行乎否乎。」

(17) 四月三日（十三日）
「…訪樵野、樵野斟酌、以爲毓慶宮似未宜、不如西苑、余未敢應。」

(18) マカートニー『中国訪問使節日記』（平凡社〈東洋文庫〉、一九七五年）一七九三年八月二十一日の記事。

(19) 『翁同龢日記』四月三十日（初十日）「…（是日張蔭桓起、慶邸亦有起、因昨日海靖到署面議德王覲見慈聖（西太后）欲得賜坐也、慶邸持不可、臣等見起復力言之、聞今日慶邸見東朝、蒙諭若必欲坐只得不見。）」
五月七日（十七日）「…朝房晤慶邸、以海靖照會德親王進見禮節八條、内有一條稱皇太后自願賜見、親王亦應賜坐云云、此節殊辦不到、擬到署令樵野即日赴德館與海靖聲明、若必欲賜坐、皇太后即不能賜見、余等均以爲是。」

(20) 『翁同龢日記』五月八日（十八日）「…昨樵野與德使晤、海靖云不敢專、須接德王後再復、」
『張蔭桓日記』五月七日（十七日）「慶邸囑訪海靖、重訂德藩覲禮。海靖云不敢專、須赴津接差、回至馬家鋪乃定、亦狡矣。」

(21) 『翁同龢日記』五月十四日（二十四日）の記事「…海靖於該親王進見東朝時仍請賜坐、慶邸拒之。入夜醇昌問福蘭格、則云彼王有屈從口氣、余等見起時備陳之」＊フランケ（福蘭格）は、ドイツの有名な漢学者であるオットー・フランケ（Otto Franke 一八六三～一九四六）。一八八八年から一九〇一年の間、中国のドイツ大使館で通訳、領事等を務めた。
＊「西利」はハインリヒのことかどうか若干の疑問はある。

(22) 『翁同龢日記』五月十五日（二十五日）の記事「（不坐、此曩經辨論始定、慶邸之力）」

(23) 謁見の様子は、『申報』五月二十二日二面の「詳述德藩入覲儀文」でも詳述されている。特徴的な点もあるので別稿で紹介したい。

(24) 『翁同龢日記』「余告福蘭格令兵退出宮門、初尚應許、既而不但不退出、並帶至南配殿陛下排立矣。」なお、この兵

隊は海軍だったようだ（『申報』五月二十日「德藩入覲」）。

(25)「德親王詣南配殿後、告余以列隊爲皇上示敬。」

(26)『德国公使夫人日記』五月十四日の記事「展示我們軍人的風姿」

(27)『張蔭桓日記』五月十三日の記事「京兆手示北洋電、述海使得滬領事密電、德親王來京有會黨欲謀害、請北洋電慶邸妥籌保護云、真奇聞也。…德親王隨帶小隊廿四名、因悟海靖會黨謀害之謠所由起也。」

(28)『德国公使夫人日記』五月十三日の記事「…「據説上海發出警告、稱在北京的廣州人正密謀對海因里希親王采取不利行動。」この話題は五月十四日にも大使館でしきりに話題になっていた。また、『張蔭桓日記』五月十三日の記事でもハイキングが上海から密電を得たことを述べる。首謀者は「会党」（秘密結社）という（秘密結社については、野口鐵郎「秘密結社研究を振り返って―現状と課題」、李世瑜『中国近代の秘密結社』を参照されたい）。

(29)『翁同龢日記』では「有塾高机」と表現する。

(30)『翁同龢日記』「海靖以下皆入殿立、余等在簷下立、戈什乾清門在殿内外立。上與彼寒暄、奕劻傳旨、蔭昌傳與翻譯（承旨時皆膝席。）」

(31)『張蔭桓日記』「是日抄報誤刊德國使臣仁壽殿覲見、德繙譯絮爭、因與慶邸商令報房更正。」

(32)『翁同龢日記』「約一刻畢、退至南配殿、其從官堅不肯出、乃添坐環列、飲食衎衎、二刻許上步行至南配殿慰勞之。」

＊衎衎（カンカン）は楽しむ様。

(33)『張蔭桓日記』「午正、上御南配殿慰勞德親王、贈以頭等第二寶星。」

当時の勲章は五等三品に分かれていた。第一等第二勲章は、世子、親王に贈られた勲章。ちなみに第一品は君主に贈られる。なお、『翁同龢日記』五月十二日（廿二日）にこの勲章についての記事が見える（「(以新到寶星四分呈遞（二雙重珠、二一重珠金地、恭備此次賞德王之用、其餘二分備賞）。」）。

(34)『張蔭桓日記』「慶邸乘間奏請上閲德國兵隊」

(35)『張蔭桓日記』「德親王立於殿階、自領步兵兩排、請上閲視。」

(36)『張蔭桓日記』「慶邸遵懿旨、導德親王及參贊乘翔雲小輪渡昆明湖。至龍王堂、石洞黝甚、德親王不敢入。」

『翁同龢日記』「慶邸、張公率亨利等上船游龍王寺。仍步石磴、登月波樓眺望。慶邸約余及海靖、葛爾士同舟、餘分坐舢板。」

(37)『張蔭桓日記』「其時合肥、常熟諸公已先往承澤園坐候矣。」

＊合肥は李鴻章、常熟は翁同龢。

(38)『翁同龢日記』「余等先退至聽起處、少坐即退出宮門回寓、

即赴承澤園候之。未正亨利到、慶邸設宴於園款待之、邸主席、余等陪坐、洋人十一人、余等十三人（胡芸楣、世伯軒、梁誠）、申正散（不送）。又徘徊一二刻、登樓坐眺、歸申正二刻矣。未入見時、南配殿廷中閑人擁塞、余飭首領太監叱出之、曰不速出即捆、並請英菊儕嚴管、廷中始肅清、歸乏極。」＊南配殿に宦官がたむろしていたのは、馳走のおこぼれにあずかろうとしたのであろうか（宮崎市定『科挙―中国の試験地獄』（中公新書、一九六三年）一四一頁を参照）。

(39) 『翁同龢日記』「今日洋菜（張公厨亦辦席、一切傢伙皆梁誠經理）、酒半邸致頌詞、少頃彼亦致頌詞、其王請慶邸寫吉祥字（邸書福壽綿長）、次李相（書諸事吉祥、四海昇平）、次及余（書永固邦交）、與余聯坐者曰□□亦請書好語、余書永敦和好、吾意在大局不肯私祝也。宴時用洋樂。」

(40) 中国の税関制度については、斎藤良衛『近世東洋外交史序説』四五九～四六一頁に詳しい。他、シュンエット・ブリドン著、高柳松一郎訳『清国総税務司サー・ロバート・ハート』は、「総税務司ハート氏は海関員の行為に関しては清国政府に対し全部の責任を帯び、其任命に関しては全権を有し、清国政府は毫末も容喙するところなし。」（附録十頁）という。

(41) 前掲『清国総税務司サー・ロバート・ハート』九十九頁附近。九十六頁後には楽隊の写真が見える。なお、*Archives of China's Imperial Maritime Customs Confidential Correspondence between Robert Hart and James Duncan Campbell 1874-1907*, Vol.3（中国語名：『中国海関密檔―赫德・金登干函電集 1874-1907』第三巻、中国語訳：『中国海関密檔―赫德・金登干函電匯編』6）に、ハインリヒがこの訪問時、その人柄で人気を得たことを述べる。

一八九八年五月二十二日付のハートからキャンベルへの電報（2697（Z/793））

Prince Henry is here—winning all hearts by his sympathetic face and charming unaffectedness（亨利親王來了、他那富於同情心的面容和動人的真誠態度贏得了所有人的心）

(42) 『翁同龢日記』「亨利出西直門即騎馬沿河行、過萬壽寺到娘娘廟、更衣易轎至東宮門」

(43) 『張蔭桓日記』「德親王至天妃廟易便衣騎馬、震東往照料。余仍至廟周旋、握手而別。從者撿拾衣籠、添雇數車始畢、西人行李此爲冗耳。竟日勞頓、不願進城、晚宿戶部公所。」

(44) 『翁同龢日記』「出乃赴慶邸宴、宴罷復至娘娘廟更衣入城（英館邀伊飯）。」

(45) 『張蔭桓日記』五月十七日の記事「震東爲言、廿四日德親

王觀賚馬、賞一銀杯、製未就、先給一紙畫此杯形、親押署、得賞者持示」＊『申報』五月二十四日の記事「追述德藩入都事」によると西便門から出て蓮花池に行った。

(46)『翁同龢日記』五月十九日（二十九日）「記德親王亨利到京事」

「…廿六日至天壇瞻仰（頭道門即下輿、各處殿座皆到、皆免冠鞠躬。海靖挈其婦往、亨利阻之）、至荷蘭國館吃飯、遊西什庫内教堂。廿七日乗馬進雍和宮、出安定門至東黄寺、奥國請吃飯、游西黄寺歸、進景西門、登景山、至意館吃飯、夜赴英館茶會。廿八日歩行至東交民巷祁羅弗洋行及玉珍古玩局、未刻赴比國館吃飯（並游比館内古玩舗）、晩赴臺基廠海關館茶會、戌正赴俄館吃飯（丑初散）。廿九日出德勝門、過沙河日館吃飯（覇昌道以下皆迎接）、復行至南口義興店公館住宿。初一日進山、巳初居庸關、大風起、午初至八達嶺（將炮台八處皆照）。復行至岔道公館（延慶州迎接）吃飯、至此折回、宿南口公館。初二日遊明陵、住湯山。初三日由湯山旋京。初四日到總署。初五日進見。初六日出京、乗火車去。」

(47)『張蔭桓日記』五月十六日（二十六日）の記事「…旋赴署接晤英使、承告以中國優待、德親王甚感激云。…」

(48)『翁同龢日記』五月十九日（二十九日）の「記德親王亨利到京事」「廿六日至天壇瞻仰（頭道門即下輿、各處殿座皆到、皆免冠鞠躬。海靖挈其婦往、亨利阻之）」

『張蔭桓日記』五月十七日（二十七日）の記事「德親王至壇門即下馬、詣壇免冠稽首、過齋宮亦然。」＊齋宮は、皇帝の寝室がある場所。

(49)『張蔭桓日記』五月十七日（二十七日）の記事「…今早詣雍和宮、午就東黄寺奥使之約。申初詣景山、皆世伯軒陪導云。」

(50)ハインリヒの写真撮影については、拙稿「近代中国における写真の導入と広がり」（『大東史学』一号、二〇一九年）「映照志奇」（『点石斎画報』五集貞集所収）を参照のこと。

(51)「記德親王亨利到京事」は二十三日とするが、『張蔭桓日記』『德国公使夫人日記』に従う。

(52)『張蔭桓日記』五月二十二日（初三日）の記事「…德親王復以膠澳中德兩國兵船同泊爲言、慶邸屬以税務、德親王唯唯、」

cf.『張蔭桓日記』五月二十日（四月初一日）の記事「…又詢以膠澳徴税事。赫謂德親王曾面詢派某税司去、我但唯唯。…」

＊なお、租借を巡る清朝・ドイツ側の認識の違いによる問題は、浅田進史『ドイツ統治下の青島―経済的自由主義と植民地社会秩序』Ⅰ章2節が詳しい。

(53)『張蔭桓日記』五月二十二日（初三日）の記事「…至德館周旋、德親王導觀其臥室、出示其妃照像、兩幼子照像、其人似非寡情者。」

(54)『德国公使夫人日記』五月二十二日の記事「親王親自接待了他們（＊中国人客）并帶領他們參觀了公使館。他們對新挂上的四幅親王夫人的畫像產生了興趣、慶親王問畫上的人是否是四位不同的親王夫人、海因里希親王答道、『不、我可養不起四位夫人。』」

(55)『德国公使夫人日記』五月二十二日の記事「中国人希望他再去一次萬壽山、親王拒絕了這一請求、堅持讓中國皇帝到城里來」

(56)ちなみに、明治三十一年（一八九八）九月二十日の伊藤博文と光緒帝の謁見も中南海の勤政殿で行われた。伊藤は、東安門から入り、景山、西華門外西苑門と進み、ここで張蔭桓など出迎え、太液池頭で舟に乘り、右に金殿王楼橋を見ながら左折して、朝房に至り、ここで奕劻が出迎えて、勤政殿で謁見したという（平塚篤編『伊藤博文秘録』続、一二七頁）。

(57)『德国公使夫人日記』五月二十二日の記事「11点、身着一身挺拔的軍服、頸上挂着拖着綬帶的黑鷹勛章的親王離開公使館前往皇宮、看上去簡直棒極了。」

(58)『翁同龢日記』五月二十四日（初五日）の記事「…午正、亨利帶五人至門外降輿乘船（御坐船、參隨等亦入、邸陪之。）余等同至德昌門、由中門入。上御勤政殿、亨利入、摘帽鞠躬、向上立致國電、數語畢。上起立、命之前握手、賜亨利坐、略言謝彼主美意。伊言膠澳練兵、答以兩國并泊、請伊照料（邸傳語。）其餘語無多、遂出、計見時不過十分鐘。賜游北海、邸與李相、張公陪之、余等皆出西苑門各歸。到家小憩、亦多俗事。申正一刻詣德館（馬差持名片。）拜德王、小駐輿、乃延入、并坐一榻、周旋刻餘、握手而別。」

(59)『張蔭桓日記』五月二十四日（初五日）の記事「…午正、德親王到門降輿、並無兵隊。隨帶五人、海靖在内、遂同乘舟至德昌門外。上御勤政殿、傳宣入見、慶邸導之。略如廿五日之儀、但面遞國電一匣。上接收後、慰勞數語、令出。至戈什按班處小飲、德親王謝余昨惠烟火、周旋片刻。慶邸導游北海、登陟石磴、詣悅心殿。登樓、余憊甚、不克登。合肥候於磴。慶邸復導游漪蘭殿、上下巖石余尤不支、賴蘇拉德安兄弟相扶侍、幸免顛墜。至漪蘭殿門外小坐啜茗、德親王勞甚。與辭、諄囑勿相送、慶邸與握手爲別、余送至蕉園門、握手爲別。」

参考文献

「申報」

『清史稿』（中華書局、一九九八年）

陳義傑整理『翁同龢日記』（中華書局〈中国近代人物日記叢書〉、一九九八年）

趙中孚編『翁同龢日記排印本』（成文出版社〈中文研究資料中心研究資料叢書〉、一九七〇年）

仲偉行『翁同龢日記勘誤録』（上海古籍出版社、二〇一〇年）

劉樺編輯、王貴忱注釈『張蔭桓戊戌日記手稿』（澳門・尚志書社、一九九九年）

曹淳亮・林鋭編『張蔭桓詩文珍本集刊』一（上海古籍出版社、二〇一三年）

任青・馬忠文整理『張蔭桓日記（中華書局〈中国近代人物日記叢書〉、二〇一五年）

（徳）海靖夫人著、秦俊峰訳『徳国公使夫人日記（1896–1899年）』（福建教育出版社〈中徳文化叢書〉、二〇一二年）

＊ドイツ語の原書：Elisabet von Heyking, *Briefe, die ihn nicht erreichten*　＊一九〇三年に Gebrüder Paetel 社から出版された。

岡本隆司『近代中国研究入門』（東京大学出版会、二〇一二年）

エリアノーラ・メアリー・ダヌタン『ベルギー公使夫人の明治日記』（中央公論社、一九九二年）

浅田進史『ドイツ統治下の青島―経済的自由主義と植民地社会秩序』（東京大学出版会、二〇一一年）

斎藤良衛『近世東洋外交史序説』（巌松堂、一九二七年）

シュンエット・ブリドン著、高柳松一郎訳『清国総税務司サー・ロバート・ハート』（博文館、一九一〇年）

Archives of China's Imperial Maritime Customs Confidential Correspondence between Robert Hart and James Duncan Campbell 1874-1907, Vol.3 Compiled by Second Historical Archives of China, Institute of Modern History, CASS ; Chief Editors, Chen Xiafei and Han Rongfang Foreign Languages Press 1992 1st ed.

（中国語名：『中国海関密檔―赫徳・金登干函電集 1874-1907』第三巻、中国第二歴史檔案館・中国社会科学院近代史研究所合編、陳霞飛・韓栄芳主編、外文出版社、一九九二年）

（中国語訳：中国第二歴史檔案館・中国社会科学院近代史研究所合編『中国海関密檔―赫徳・金登干函電匯編』6（1874-1907）（中華書局、一九九五年））

平塚篤編『伊藤博文秘録』続（春秋社、一九三〇年）

Prinz Heinrich von Preußen: Eine Biographie Des Kaiser Bruders, Ernst D. Baron von, Böhlan, 2013

宮内庁編『明治天皇紀』四巻、五巻、九巻、十二巻（吉川弘文館、一九七〇～一九七五年）。
野口鐵郎「秘密結社研究を振り返って―現状と課題」（『明清時代史の基本問題』（汲古書院、一九九七年）所収）
李世瑜『中国近代の秘密結社』（研文出版、二〇一六年）
山中敬一「１８８０年プロイセン皇孫ハインリヒ吹田遊猟事件」（『関西大学法学論集』六七―一、二〇一七年）
張鳴「一場不為人知的東西礼儀之争」（『文史博覧』二〇一五年第八期、中国人民政治協商会議湖南省委員会、二〇一五年）
王蓮英「張蔭桓与戊戌年間清廷外交儀礼改革―以光緒皇帝接見德国亨利親王為例」（『歴史檔案』二〇一一年第三期、中国第一歴史檔案館、二〇一一年）
王開璽「戊戌時期清廷覲見礼儀的改革」（『北京社会科学』一九九九年第三期、北京市社会科学院、一九九九年）
王開璽「外国公使覲見清帝的地点之争与中外関係」（『晋陽学刊』二〇一〇年第三期、山西省社会科学院、二〇一〇年）